

クリステーロの乱の展開と軍事社会史における士気の問題

古畑正富

要旨

The purpose of this paper is to discuss the development of the Cristero rebellion (1926—1929) and the significance of morale seen in it. In fact, we think, the Cristero movement reflects an essential part of the Mexican revolution, and more importance should be attached to the young soldiers among the Cristeros who were thrown into the vortex of war. Because many deserters appeared from the Federal army, due to the corruption of morale, while the young soldiers were killed in the bloody battlefield, mustering their boyish vigour and even fighting hand to hand, in order to keep the religious freedom (namely nationalism) of the Catholic church.

As a result, there is reason to assume that the destruction of social and economic foundation of the Catholic church led to the casus belli of the Cristero rebellion. In the June 21, 1929, peace agreement, President Emilio Portes Gil's statement made clear the utilitarian policy of the Federal government. Therefore it is certain that such military circumstances were decisively influenced by the idea of "Calles Law" (1926).

【キーワード】「国民軍」、士気、少年兵、脱走兵

1. はじめに

意外な書き出しに驚くかもしれないが、20 世紀を襲った戦乱の時代に対して、ある程度のコメントを述べることははじめよう。たとえば、ナチス・ドイツをめぐる出来事に関しては、すべてが悪夢の走馬燈を見るに等しく、現在に至るまで、この世のものとは思えない影像のごとく、夥しい人々の脳裏に焼きついたかの観がある。ならば、歴史上、それほどの戦慄や衝撃を人間精神に招来したナチ体制は、一体何であったか。この難問は政治史を基軸として多角的に議論されてきたが、筆者の管見による限り、近年とみに社会史の研究が増えている印象を抱く。こうした動向は言うまでもなく、外的状況のもつ強い力が個人の孕む弱い力を上書きする、いわば平凡かつ素朴な成り行きに、多くの研究者が焦点を当てたことを示す⁽¹⁾。

実際、個人と状況が複雑に同調化しつつ、個人が状況の内的中核へ転じた場合、癒着したイメージを分離することは容易ではない。なぜなら、運動するカリスマ支配が軌道に乗ったとき、まるで天空の《静止衛星》のように振舞うケースさえ存在するからである。そこでは、変化と安定が相対し、緊密な連続性を表している。かかる曖昧模糊とした動静を見晴かし、俯瞰的な全体像を与えるため、集団化し大衆となる以前の個人がどんな位相にあり、どこに臨界点 (critical point) が置かれるかを、我々は一層慎重に検討しなければならない。これらの作業を通じ、

論理的な側面から、個人と状況の対応関係を浮き上がらせた要因がよりよく理解されるだろう²⁾。

それゆえ、戦争というテキストを脱構築し、その本質を「上からの歴史」よりも「下からの歴史」の主体である戦場参加者の広がりから再解釈する試みは、第二次世界大戦後、哲学や精神分析の影響を色濃く受けた歴史学の新しい波として、軍事社会史の方法論を推し進める鍵となる役割を果たした³⁾。以上の問題意識のもと、本稿では、メキシコ史のクリステーロの乱（1926－1929年）を事例に、軍事社会史的な意味をめぐる考察を行ない、独自の道標を作るべく、私見を提示してみようと思う。なお、本稿の構成は、次のとおりである。1. はじめに／2. クリステーロの乱の展開について／3. 軍事社会史における士気の問題／4. おわりに。

2. クリステーロの乱の展開について

嵐が吹き荒れるメキシコ革命を駆け抜けた群像のうち、とりわけ眩いばかりの異彩を放つのが、エミリアーノ・サパタ（1879－1919年）であろう。サパタは故郷モレロス州における自分の「小さな祖国（*patria chica*）」での戦いに終始した革命家であった⁴⁾。「土地と自由」の価値をひたすら追求した、彼の「アヤラ綱領（Plan de Ayala）」にみる農地改革プログラムは、1917年憲法にも活かされたわけだが⁵⁾、その余波に煽られ、大きく命運を左右される組織と人々も存在した。彼らは鏡像のごとく「宗教と自由」の旗を掲げ、中央の連邦政府に対してクリステーロの乱（1926－1929年）を起こした、地方に盤踞するカトリック教会の支持層であり、国本伊代が研究史の大略を辿って、その展開をわかりやすく説明する⁶⁾。主要な4つの論点は、次のとおりである。本稿の記述とも密接に関係する事件なので、少し長いが整理したい〔筆者が補足〕。

(a) クリステーロの乱に参加した諸勢力は、LNDR（Liga Nacional Defensora para Libertad Religiosa＝宗教の自由を守るための国民連合）⁷⁾、およびACJM（Asociación Católica de la Juventud Mexicana＝メキシコ青年カトリック教会）、コロンブス騎士団、カトリック婦人協会などを中心とした、伝統的なカトリック信仰を継承する比較的豊かな中産階級以上の人々（地主＋自作農）と、彼らの周辺で暮らす敬虔な下層の人々であった。「カリエス法」（1926年）の施行に伴って加速するはずの、カトリック教会とアシエンダを源流とする慣性的かつ微温的な地域社会の解体に、これらの信徒集団は深刻な危機意識を表明し、連邦政府への反撥を強めていた⁸⁾。

(b) 「カリエス法」の正式名称は、Ley reformando el Código Penal para el Distrito y Territorios Federales sobre delitos del fuero común y delitos contra la Federación en material de Culto religioso y disciplina externa と呼ばれ、「宗教団体と外国人が犯す国家犯罪に関する刑法の改正」を趣旨とした、全33条から成る行政命令である。だから「カリエス法」の意図が、メキシコのカトリック教会を政治的なアリーナから追放するため、それを支える社会的・経済的基盤を崩すことに置かれていたことは間違いない。たとえば、第21条において、宗教団体の不動産の取得や所有が禁止され、とくに第22条は、「教会堂のみならず宗教団体が所有するすべての不動産が国に帰属するものとされ、教会堂は宗教目的で利用される場合に限り貸与される」と規定している。プルタルコ・エリ阿斯・カリエス大統領（在任 1924－1928年）は、アルバロ・オブレゴン政権下で内務大臣の職権を握り（1920－1923年）、その卓越した公安・監視能力に基づき、教育を含む産業、通商、労働といった分野に、カトリック教会が浸透した事態も知悉していた。

(c) 教会のストライキと宗教サービスの停止をへて、1927年1月1日、一斉に挙兵したカトリック信徒は、「キリストは王なり、万歳（¡Viva Cristo Rey!）」と叫んで激しく抵抗したことから、クリステーロと名づけられた。当初、メキシコ各地にクリステーロの戦線は拡大したが、やがて縮小・反転して、早くも1927年8月頃には、カトリック教会側の本拠地たる中西部方面⁽⁹⁾へ追い込まれ、戦争区域が限定されるに至ったことは重要である。その結果、LNDLRは、米国のカトリック教会を仲介する資金獲得に失敗し、連邦軍（Federal army）と戦うのに不可欠な兵力や武器、わけでも消耗戦に耐えうる兵站（logistics）を整えることが叶わなかった⁽¹⁰⁾。だが、熾烈な信仰と地域社会の伝統的価値観に根ざすクリステーロの反乱軍を、圧倒的に有利な軍事力をもつ連邦政府さえ、簡単に鎮王することができなかった。したがって、弾薬が不足する劣悪な環境に陥り、貧弱な装備で連邦軍と衝突したクリステーロの多くが、教会護持のための殉教者になったことは確かである⁽¹¹⁾。同時に、正規軍に抗して執拗なゲリラ戦術を採ったクリステーロたちは、しばしば一般市民を巻き込んで死傷させた。連邦軍は、散兵と化し襲来する彼らの攻撃に手を焼き、冷徹さや効果的な威嚇ならびに示威行動のため、カトリック狩りと称されるような、殺害した敵兵の死体を電柱や樹木に吊るす報復・蛮行を繰り返した⁽¹²⁾。

(d) 結局のところ、クリステーロによる武装蜂起の代償は高くついた。クリステーロとして立ち上がった信徒数は総計で約4万人、そのうちの14,000人が「和平協定」（1929年6月21日）⁽¹³⁾により武装解除されたと、連邦政府のエミリオ・ポルテス＝ヒル大統領（在任 1928－1930年）は政治家らしく慎重に発言している。武力闘争が激化した1927－1928年および1929年前半の30カ月間で落命した人数は、24,000人から3万人に達したと推測され、ほぼ半分がクリステーロたちであった。しかし、内戦の混沌たる成り行きに照らしてみても、実働兵力と死傷者の数量を上方修正し、より大きな数値を提示する試算もあり、一説では10万人の戦闘員——連邦軍（6万人）＋クリステーロ（4万人）が戦死したともいわれる⁽¹⁴⁾。他方、火力の差を利用して進撃する連邦軍は、後述のとおり、7万人を超える兵力を投入しつづけ、戦略的な《包囲壁》の実現と反乱の平定に努めたのである。

かくして、メキシコ革命の渦へ呑み込まれ、所謂「まつろわぬ民」の典型と見なされるクリステーロだが、軍事上の利害損得から客観的に判断すれば、クリステーロの乱は不合理な戦争であり、カトリック勢力を政治的に統括するLNDLRが立案した戦争計画は不完全なものにすぎなかった⁽¹⁵⁾。それでは、何故、連邦軍はクリステーロの乱において、予想外の苦戦を強いられたのか。その点、(a) (b) (c) (d)から炙り出されてくるのは、戦争とは畢竟、志操堅固な人間力を競い合う場であるという皮肉な現象に他ならない。

3. クリステーロの乱と軍事社会史における士気の問題

ナポレオンのロシア遠征（1812年）を引き合いに出すまでもなく、地上部隊たる陸軍が抱えるアキレス腱は、理性を失って戦場離脱を選択した「ふつうの兵士」の登場であり、じわじわと迫りくる惨めな死に対する恐怖に取り憑かれ、群れなす脱走兵を未然に防ぐことが、軍隊の秩序と士気（morale）を維持するために絶えず要求された⁽¹⁶⁾。この側面は心の闇として、人間の主観性（ego）と分かちがたく結びつき、よく訓練された古代ローマ軍団すら、敵前逃亡を警戒するあまり、デキマティオと呼ばれる慣習法を編み出したぐらいである。デキマティオとはラテン語で、籤で十人につき一人の兵士を処刑するという罰則であり、上官の命令に服従しなかった部隊とか、戦場で臆病

風に吹かれた部隊があれば、十分の一の割合で兵士が無作為に抽出され、今まで戦友だった者たちが不運な犠牲者を棍棒によって殴り殺した⁽¹⁷⁾。そうした凄まじい「軍国精神」に触発され、ハドリアヌス帝（在位 紀元 117－138 年）の属州視察を機会として、軍紀（ディスキープリーナ）への祭儀が発展したのである⁽¹⁸⁾。

ここで、古代ローマ軍団の事例を扱うからには、それ相応の理由がある。ジーン・A・マイヤーは、クリステーロの乱の軍事社会史的な意味を探り、連邦軍の兵力（1927－1929 年）と脱走兵（1926－1932 年）の詳細な統計を明らかにしたが〔表 1 を参照〕、結果として、いくつかの面白い事実が浮かび上がる。第一に、連邦軍の兵力は正規軍の平均 71,681（母標準偏差 6,847）、古代ローマ軍団でも馴染み深い、補助軍（auxiliaries）を加えた混成軍団では、平均 80,681（母標準偏差 13,404）を記録し、ランダムな要素の分散が約 95.8%（ $13,404 \div 6,847$ ）も上回っている。補助軍はラテン語でアウクシリアと呼ばれ、軍団（レギオー）を支援する地方の諸部隊である。しかし、連邦軍が短期間の梃子入れ（1928－1929 年）を行なった副作用により、求心力より遠心力が際立ち、統制が弛緩し軍紀の素乱へと直結していった。第二に、連邦軍の宿痾ともいべき脱走兵は、平時（1926 年＋1930－1932 年）では、平均 9,291（母標準偏差 1,135）に及んでいるが、戦時の 1928－1929 年に限定すれば、平均 24,607（母標準偏差 3,393）のように 2.03～3.43 倍の増大を示し、同時期に投入した補助軍の規模——平均 22,500（母標準偏差 7,500）の水準を超える勢いを見せたことは看過することができない。

表 1 連邦軍の兵力（1927－1929 年）と脱走兵（1926－1932 年）の統計

| 【連邦軍の兵力】 | | 単位（人） | 【脱走兵の統計】 | | 単位（人） |
|-----------------------------|--|--------------------|----------|--|-------------------|
| 1927 年 6 月 | | 79,759 | 1926 年 | | 9,421 |
| 1928 年 2 月 | | 76,243 | 1927 年 | | 不詳 |
| 1928 年 6 月 | | 72,441+15,000 の補助軍 | 1928 年 | | 28,000 |
| 1929 年 6 月 | | 70,367+30,000 の補助軍 | 1929 年 | | 1 月～6 月の間に 21,214 |
| 1929 年 12 月 | | 59,596 | 1930 年 | | 9,000 |
| (補説)「和平協定」(1929 年 6 月 21 日) | | | 1931 年 | | 7,784 |
| の締結後、連邦軍は召集兵を削減した。 | | | 1932 年 | | 10,958 |

出典: Meyer 1976, p. 160.

出典: Meyer 1976, p. 161.

にもかかわらず、連邦軍が脱走兵に対して、ことさら不安や困惑をおぼえた痕跡はない。そもそも組織から零れ落ちて《抜け忍》と化した人間は、それ自体の潜在的意志によって危険な行動へ踏み切る傾向にあるが、連邦軍の脱走兵たちがなし得たのは、総計 144,252 ペソを盗んで持ち逃げした程度にすぎない⁽¹⁹⁾。したがって、古代ローマ軍団のケースとは異なり⁽²⁰⁾、つまるところ、連邦軍は兵員の補充に腐心すれば事足りると認識したのだ。軍事社会史の視座からいえば、クリステーロの乱の背景は、国本伊代が集計した「年別宗教団体所有不動産の接収件数（1920－1940 年）」⁽²¹⁾からも推定することができる。当時のメキシコでは、長年、ポルフィリオ・ディアス政権（1876－

1911年)⁽²²⁾において、連邦政府とカトリック教会の間で互いに了解してきた暗黙の境界（ゾーン）を、無遠慮に踏みこむ事件が頻発した。すでに1920年（2件）の時点で予兆が見られるが、1926年の「カリェス法」の成立後、16件へと増加し、1927年には85件に達したことで、連邦政府による反カトリック教会の指針は本格化の局面を迎えたといえる。爾来、クリステーロの乱を挟んで、エミリオ・ポルテス＝ヒル → パスクアル・オルティス＝ルビオ（在任 1930－1932年）→ アベラルド・ロドリゲス（在任 1932－1934年）とカリェス派の大統領が居並ぶけれど、「和平協定」の締結をめぐる手控えた場合を除けば、全体的な流れとして、不動産の接収件数は扇状地のようには広がってゆく⁽²³⁾。そして、接収された資産が「教会堂」やその付属建物に集中している点は、クリステーロの乱の戦争原因が経済問題のほうへ傾斜していたことを示唆する。

してみると、日本近世史の豊臣政権に跋扈した、計数に通曉し、緻密な国家経営に長けた吏才の士のごとく、《戦争企業家》の色彩を帯びる連邦政府の軍事官僚団は、大規模な物資の集積・輸送・分配という業務を遂行することにより、あくまで感情を交えず、淡々と機械的に、クリステーロの乱の終息を目指したと考えられる⁽²⁴⁾。その心象景観は、エミリオ・ポルテス＝ヒル大統領が「和平協定」で披瀝した功利主義的な立場と見事に合致するだろう。実際、金権政治の匂いが立ち籠める、カリェス流のカリスマを実体化し、統制された組織に相応しい政治路線として踏襲するべく、彼はカトリック教会の地下経済を撲滅しながら、地主・農園主からの大口献金を含めた、余計な経済力を所有しない、ミサに代表される宗教サービス専門の団体へ格下げすることを狙った⁽²⁵⁾。要するに、クリステーロの乱は、軍事学で定義される（間接的アプローチの）「通商破壊戦」の範疇に入るといっていい。

むしろ、そんな荒涼とした環境は、連邦軍の兵士たちへ「国家意識」を植え付ける契機にはならず、むしろ殺伐な「傭兵部隊」の匂いを漂わせていた。菊池 2002 の言葉を借りれば、連邦軍は正規軍（常備軍的傭兵）＋補助軍（非常備軍的傭兵）に二極分化され、前者より給与も糧食もはるかに悪い後者は、膠着した情勢に失望し、半ば自暴自棄の状態に囲まれた者たちの間では、大麻（マリファナ）が蔓延した。私見になるが、肝心の士気が著しく衰えた、その生々しい人間の風景へ向かう視線こそ、脱走兵の割合を膨らませた要因の一つではないか⁽²⁶⁾。とすれば、「平時時に犬の生活であったなら、戦時には本物の地獄となった」というマイヤーの批評⁽²⁷⁾は、どうやら口では言い表せない奇妙な罫りがまつわっている、クリステーロの乱を端的に表現したものと言わざるを得ない。

さて、マイヤーの試算によれば、クリステーロの軍隊は1929年5月において、45,000～50,000人の志願兵を動員したが、連邦軍との兵力差は埋めきれず、農民兵が蟄集したものの、人海戦術では活路を開けなかった⁽²⁸⁾。実のところ、クリステーロの軍隊の財政基盤は脆弱であり、誘拐や列車強盗といった非合法の手段に訴えることを余儀なくされた⁽²⁹⁾。所詮、夜盗まがいの作戦では小火器しか入手できず、安定した補給ルートを確保することは難しい。それゆえ、物量面で追い詰められたクリステーロの軍隊は精兵主義に徹し、ウィンチェスター騎兵銃や拳銃を馬上で巧みに操る、ベテラン兵（30－39歳）を側面攻撃・後方攪乱の切り札として、出来るだけ温存する必要に迫られた⁽³⁰⁾。もっとも、これらの精鋭を保持するには、捨て石となる存在が求められ、一身をカトリック教会に捧げる意欲に燃え、世俗の苦に汚れていない純粋な少年たち、あるいは若き青年たちが包囲する敵軍へ正面から強襲・突撃しなければならない⁽³¹⁾。まるで「少年十字軍」の有様か、空しく散華した「特攻兵士」の無常な世界が思い出されるが、クリステーロの軍隊において、[前衛（少年兵）＋中衛（青年兵）]＋後衛（ベテラン兵）という三層構造の

戦闘序列——ラテン語のトゥリアーリイを、主戦場から離れた辺境の地でも貫いた様子が窺える [表 2 を参照]。

表 2 クリステーロの軍隊における徴募・動員状況

| 年齢 | 全体の比率 | (補説) この標本調査では、クリステーロの軍隊において、少年兵 (11-19 歳) と青年兵 (20-29 歳) を合わせた、若い世代の比率が 49 % に上っていることがわかる。そこで、少年たちは孤児になったか、あるいは兄弟を殺され、復讐心を煽られた場合も少なくない。また、壮年の兵士ばかりでなく、引退した老人すら徴募されたことに注意を払うべきであろう。 |
|---------|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 11-19 歳 | 18 % | |
| 20-29 歳 | 31 % | |
| 30-39 歳 | 39 % | |
| 40-49 歳 | 8 % | |
| 50-59 歳 | 2 % | |
| 60 歳以上 | 2 % | |

出典: Meyer 1976, p. 98 の表 10 「キンタナロー旅団 (Brigade) の 2,000 人の兵士を標本調査した、クリステーロの年齢分布」。

興味深いことに、第二次世界大戦時のスターリングラード攻防戦 (1942-1943 年) で、ソ連軍は最前線に充分訓練されていない少年兵を繰り出し、ドイツ軍が闇雲に発砲し、無駄な弾薬消費を計ったことが知られている。同様に、弾薬の余裕がない以上、クリステーロたちにとっても、ハードな勇敢さが原動力 (vigour) となり、防御陣地での近接戦闘に効果的な武器の投入は急務であった⁽³²⁾。その際、重視されるのは、フランス革命以降の 19 世紀的な歩兵の白兵戦を蘇らせる、縦隊の一斉射撃に続き、浸透のため《銃剣突撃》を敢行する肉弾戦術だろう⁽³³⁾。かつて職業柄、山刀と棍棒、石の礮^{つぶて}を手に取った農民層に似つかわしいが、純真な少年兵の死が戦場にもたらす血塗られた地獄絵図は、おのずから戦意の低い連邦軍の兵士たちを動転させ、逆に彼らの心を殺いだと推察される。

「……しかし我々のうち誰もが、希望を捨ててはいません。今日戦いを諦める者は、すべてを失うのです。我々は勝利するほかありません。つまり我々は耐え抜かなければならないし、待ち通さなければいけません。あと数カ月でどうなるかわかることでしょう」⁽³⁴⁾。——小野寺 2012 はこの野戦郵便 (1945. 4. 11) などから、「防衛的」な心理と結びついた兵士 (軍曹) のハードさを読み解くが、徴兵忌避者や脱走兵の姿を顕在化しなかった、クリステーロの軍隊における士気の在り方、ひいては民兵 (militia) から成長する「国民軍」の萌芽を見極めるうえで有意義であろう⁽³⁵⁾。なぜなら、無力な批判は虚無へ逃げるよりほかに道がなかった封建制の原理とは別次元 (ナショナリズム) に現前し、クリステーロの少年兵は平和な「ユートピア」を信じ、無償の愛に満ちて落命したからである。

4. おわりに

これまで論及してきたとおり、本稿は、Meyer 1976 並びに国本 2009 などの先行研究に基づき、クリステーロの乱 (1926-1929 年) について、軍事社会史の観点から記述したものである。紙幅の都合により、クリステーロの乱を包括的に考察しなかったが、菊池 2002 や小野寺 2012 の分析に添って、古代～近現代に継起する戦場の心性やそ

こに息づく人間ドラマを抽出することが期待されるだろう⁽⁶⁾。クリステーロの乱において、連邦軍は圧倒的な戦力を誇ったが、決定的な会戦が行なわれず、主として陰惨な消耗戦の様相を呈した。クリステーロの軍隊は兵站の不備に苦しんだ結果、むしろ頑固な精兵主義に立脚し、一方、連邦軍は物量を頼むことで、敵方を枯渇させる辛辣な戦略を変えなかった。それゆえ、クリステーロの乱を「宗教戦争」⁽⁷⁾と認識したカトリック教会側と一線を画しつつ、連邦政府の首脳たちは「通商破壊戦」として明快に割り切り、流民のような「傭兵部隊」を御するのに適した、功利主義的な姿勢をくっきり映し出したことが注目される。

しかし、人間精神は不可思議な働きをする。氷炭相容れずという言葉があるが、有利な態勢を保った連邦軍から脱走兵の群れが続々と現われ、不利な状況に陥ったはずのクリステーロの軍隊は、少年兵の奮闘も相まって、熾火に比すべき士気が一段と高揚し、戦術面の臨機応変によって互角以上の戦いを演出したことを忘れてはいけない。それはいみじくも、民兵 (militia) から成長する「国民軍」の萌芽へ繋がってゆくというのが、本稿なりの創意を加味した結論であり、人間の「生活世界」に鑑み、我々が絶えず遭遇し悩むのは、大衆の根本的な価値観が計算的か、もしくは利益を起点として機能するか否かという問題であることを、末尾ながら強調しておきたい。

注

- (1) ゴールドハーゲン論争とそれ以後の「ミクロ過程論的転回」を含めた、最近のドイツ史学では、小野寺 2012 (書評：一ノ瀬 2014) のアプローチが注目に値する。
- (2) 単純な「ヒトラー神話」を否定した、イアン・カーショ어의研究はもとより、アリー 2012 が示唆に富む。それによると、大衆を物質的利益へ誘導した、蠱惑的な社会に溢れた投機的気分の中で、多くの官僚や軍人たちが主として財政の観点から、戦争政策の立案とその実施に邁進したプロセスが把握されるであろう。
- (3) 「狭義の軍事史 (技術史)」から「広義の軍事史 (社会史)」への遷移に関しては、石黒 2013 の提供する見取図が要領を得ている。
- (4) 増田 1968, pp. 161-163 ; 国本 2014, pp. 49-91.
- (5) 先駆となったチャルコの農民反乱 (1868 年) や無政府主義の影響に関しては、山崎 2012 の見解が有益である。この反乱を準備する局面において、指導者フリオ・ロペスは、フランシスコ・サラコスタを通じ、ロシアのアナーキスト、ミハイル・バクーニン (1814-1876 年) の思想に接触したと考えられる。その点、ロシアの諷刺文学の系譜を振り返れば、ニコライ・ゴーゴリ『死せる魂 第1部』(1842 年) から、我々が未だに学ぶところは少なくない。
- (6) 国本 2009, pp. 207-239 は広範な史料を渉猟し、クリステーロの乱における前史―本史―後史 (1920-1940 年) の要諦を抽出する。
- (7) LNDLR の組織と流動的な構造に関しては、Meyer 1976, pp. 75-82 を参照。LNDLR は「米国への派遣団 (Delegates to the U. S. A.)」を擁していたが、彼らが連絡線を維持するために情報将校の責務を負ったと考えられる。
- (8) 国本 2009, pp. 225-227.
- (9) 中西部方面の兵要地誌に関しては、Ibsen 2010 が有意な情報を提供する。
- (10) 国本 2009, 229 頁 (図 8-1)。それによると、LNDLR が 1925-1927 年に組織した活動拠点は、中西部のハリスコ州

(17 カ所), グアナフアト州 (16 カ所), ミチョアカン州 (16 カ所) に集まっていたが, 北部のチワワ州 (16 カ所) や
ドゥランゴ州 (15 カ所) にかけても抜かりなく設けられた。この方針は紛れもなく, 闘争初期において, LNDLR が米
国のカトリック教会の支援を求め, 両者の連携を模索していたことを意味する。クリステーロの軍隊の装備に関して
は, Meyer 1976, pp. 118-120 ; クリステーロの軍隊が苦しんだ弾薬の不足とその節約に関しては, Meyer 1976,
pp. 167-168 を参照。彼らにとって, 弾薬筒 (cartridge) は大事な支給品だったが, 軍服・靴・医薬品・毛布, その
他の雑貨の欠乏も, 戦闘に支障をきたすほど深刻であり, 個々の兵士は至る所で不平を鳴らしていた。

- (11) Meyer 1976, pp. 190-193 (Martyrdom).
- (12) 連邦軍の残酷な拷問と捕虜虐待に関しては, Meyer 1976, p. 165 を参照。
- (13) クリステーロの乱と「和平協定」に関しては, 国本 2009, pp. 227-233 が平明である。
- (14) Meyer 1976, pp. 178-180 (Statistical Summary). それによると, クリステーロの乱において, 50 万人もの難民
が発生し, 米国領へ移動したと推測される。
- (15) 和平交渉と事後処理に際して, LNDLR の急進的な一部指導者が, ヴァチカンやメキシコのカトリック教会上層部こ
よる政治的決断と対立し, 抜き差しならぬ内紛を引き起こしたことは, その事実を裏づけるだろう。国本 2009, p. 235.
これが 1934 年に沸点へ達する「第二次クリステーロの乱」を誘発したことは異論の余地がない。
- (16) 本稿は第三節の記述に当たり, 小野寺 2012, pp. 53-125 (第三章 戦友意識・男らしさ) から重要な知見を得た。
- (17) 本村 2011, pp. 252-253. ギリシア人歴史家ポリュビオスは, 『歴史』(VI 38) において, 「……ローマ人の採用す
るこの習慣は, 乱れを是正し軍紀を肅清するための最善の方法だといえよう」(原文ママ) と記している。
- (18) ゴールズワーシー 2005, p. 109. 抽象的な概念がローマ社会の公的礼拝の対象になるのは特殊な有様ではないが,
この場合, 忠誠心を鼓舞するだけでなく, 軍事上の効率を向上させる目的もあったことは疑えない。また, 忠誠宣誓
(サクラメントム) は宗教的な意味を兼ね備えており, 時には宣誓の守護霊 (ゲーニウス・サクラメンティ)
が礼拝されていたことが判明している。
- (19) Meyer 1976, p. 161.
- (20) もちろん, 軍紀の紊乱を警戒するのは, 機密漏洩を防ぐという実利的な根拠が存在した。ローマ人歴史家アンナエ
ス・フロールス『ローマ史概要 (*Epitome rerum Romanarum*)』によれば, 「スパルタクスの反乱」(紀元前 73-71 年)
の指導者スパルタクスの出自は, 補助軍からの脱走兵が捕縛後, 奴隷の身分へ落ちたものと伝えられ, 軍事の専門
知識を身につけ, ローマ軍の内情に通じていた可能性が見出される。本村 2011, p. 153 を参照。
- (21) 国本 2009, p. 236 (表 8-2). 加えて, 国本 2009, pp. 353-360 (資料 3) を参照。
- (22) 大垣 2008, pp. 177-194.
- (23) たとえば, 1928 年 (2 件), 1929 年 (0 件), 1930 年 (11 件), 1931 年 (10 件), 1932 年 (52 件), 1933 年 (37 件),
1934 年 (150 件) という推移も挙げておく。
- (24) 豊臣政権の歴史的意義に関しては, 川戸 2014 に詳しい。それによると, 豊臣政権が第一としたのは列島全体規模
での統一的な軍役体系整備を最優先することであり, それはつまり軍役賦課の効率的遂行を可能にすることであった。
司馬 2004, pp. 323-345 の見地も, これと軌を一にしている。

- (25) エミリオ・ポルテス＝ヒルの声明 (statement) と、その真意を代弁する形になった、モレリア大司教・ローマ教皇使節レオポルド・ルイス (Leopold Ruiz) の声明に関しては、Bailey 1974, pp. 311-312 に文章が掲載されている。
- (26) 補助軍の兵士たちの出自に関しては、Meyer 1976, p. 106, p. 160 などを参照。それは明らかに、ごった煮の召集兵が織りなす人間模様であり、(クリステロ以外の) 貧しい農民、労働者、囚人や無宿の浮浪人たちを内在する、いずれも命令違反の不平分子になりがちな人々から構成されていた。この問題に関して、菊池 2002, p. 104 が「非常備軍的傭兵」の身体に染み付いた、飲む打つ買うの三拍子揃う、利己的で無軌道な暮らしぶりを紹介する。
- (27) Meyer 1976, p. 162.
- (28) Meyer 1976, p. 85 および p. 225 の注 4 を参照。クリステロの軍隊の構成に関しては、Meyer 1976, p. 86 (TABLE 6), pp. 166-167 を参照。それによると、農民兵と合流し、保守的な町人兵の集団も従軍していたとみなされる。
- (29) Meyer 1976, pp. 120-121.
- (30) 米国政府は利権保護を動機として、メキシコ連邦政府の支持を決断したのみならず、一大補給基地の格好で北方に鎮座し、第一世界大戦後で流通した武器の余剰在庫を売り捌くことに尽力した。Meyer 1976, p. 163 を参照。それによると、連邦軍は米国政府により便宜を図られ、大量の弾薬と武器を輸入し、まして 57 体の航空機をも有していた。これらの条件を考慮すれば、連邦軍は、各国でロングセラーとなった、水冷・ベルト給弾方式のマキシム機関銃、あるいは米国製のブローニング機関銃を使用しても不思議ではない。対照的に、弾薬の不足から、クリステロの軍隊が戦場において、塹壕や鉄条網を採用し、機関銃の掃射とその弾幕を活かすことには無理があった。関連認識として、佐藤亜紀『ミノタウロス』(2007 年) にみる戦闘描写が面白い。
- (31) クリステロの乱に参加した少年兵に関しては、Quezada 2012 が提供する映像／写真を参照。また、① 90 人に上る処刑された司祭 (Meyer 1976, p. 75 [TABLE 4]) ② 女性旅団の挺身 (Meyer 1976, pp. 131-137) ③ 学歴社会から解放された疑似家族的な生活世界 (Meyer 1976, pp. 126-127) に刺激された少年兵たちの奮起も勘案しなければならない。これらの事情が纏れ合って、彼らの徳性 (morality) を高進させ、単なる片隅の兵士から、死をも厭わない戦士へ変貌させる機縁になったと考えられる。
- (32) Meyer 1976, pp. 168-170 (Morality).
- (33) 連邦軍の主力をなす歩兵には、5 発クリップ式装填弾倉 (magazine) を内部に組み込み、銃剣を装着することができるモーゼル M98 型 (Gewehr 98) 乃至スプリングフィールド小銃 M1903 型のような、ボルトアクション式小銃が配備されていた。とはいえ、単発式や管状弾倉など、旧態依然だったクリステロたちも、連邦軍から奪取してモーゼル系統の小銃を携えたことは、5 発クリップを収めた彼らの弾帯 (Meyer 1976 などの写真) からわかる。
- (34) 小野寺 2012, p. 112.
- (35) 小野寺 2012, pp. 110-114 と共に、菊池 2002, pp. 205-212 が示唆に富む。さらに、桑原 1975 ; 古畑 2010 を参照。
- (36) 本稿が予め想定した、クリステロの乱をめぐる根源的イメージは、デヴィッド・リーチ監督の映画『ドクトル・ジバゴ (Doctor Zhivago)』(1965 年) の一場面で、ロシア革命後の苛烈な内戦下、弾除け同然の扱いを受けた (反乱の抛り所たる白軍に属す) 少年兵たちが明滅する機関銃に撃たれ、孤独に、そして儚く、赤い大地へ次々と力尽き倒れゆくエピソードとさほど変わらない。

- (37) ちなみに、国本伊代はクリステロの乱の性格について、自由主義派vs保守派というメキシコにおける内戦構造とそのパラドックスを追究するとき、大切な手掛かりを与えるものと述べた。国本 2009, 332 頁の (第8章) 注1。さらに、リヴェ 1968 を参照。

参考文献

- アリー, ゲッツ (2012) 『ヒトラーの国民国家——強奪・人種戦争・国民的社会主义』, 芝健介 (訳), 岩波書店.
- 石黒盛久 (2013) 「書評: 白幡俊輔『軍事技術者のイタリア・ルネサンス——築城・大砲・理想都市——』 (思文閣出版, 2012 年)」『史境』65, pp. 110-116, 歴史人類学会.
- 一ノ瀬俊也 (2014) 「書評: 小野寺拓也『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」——第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」——』 (山川出版社, 2012 年)」『史学雑誌』123-2, pp. 111-119, 史学会.
- 大垣貴志郎 (2008) 『物語 メキシコの歴史——太陽の国の英傑たち——』中公新書.
- 小野寺拓也 (2012) 『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」——第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」——』山川出版社.
- 川戸貴史 (2014) 「奥羽仕置と会津領の知行基準——『永楽銭』基準高の特質をめぐって——」『史学雑誌』123-4, pp. 1-34, 史学会.
- 菊池良生 (2002) 『傭兵の二千年史』講談社現代新書.
- 国本伊代 (2009) 『メキシコ革命とカトリック教会——近代国家形成過程における国家と宗教の対立と宥和——』中央大学出版局.
- 国本伊代 (2014) 『世界史リブレット人 75 ビリャとサパタ——メキシコ革命の指導者たち——』山川出版社.
- 桑原武夫 (編) (1975) 『世界の歴史 10 フランス革命とナポレオン』中公文庫.
- ゴールズワーシー, エイドリアン (2005) 『古代ローマ軍団大百科』, 池田裕・古畑正富・池田太郎 (訳), 東洋書林.
- 古畑正富 (2010) 「メキシコのグアダルルーペ聖母信仰の軍事史的意味——軍事目的に利用された聖母に関する一考察——」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』10, pp. 63-84, 京都外国語大学 京都ラテンアメリカ研究所.
- 司馬遼太郎 (2004) 『新装版 播磨灘物語(四)』講談社文庫.
- 増田義郎 (1968) 『メキシコ革命——近代化のたたかひ——』中公新書.
- 本村凌二 (2011) 『帝国を魅せる剣闘士——血と汗のローマ社会史——』山川出版社.
- 山崎眞次 (2012) 「チャルコの農民, フリオ・ロペスの反乱」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』12, pp. 79-99, 京都外国語大学 京都ラテンアメリカ研究所.
- リヴェ, ジョルジュ (1968) 『宗教戦争』, 二宮宏之・関根素子 (訳), 白水社文庫クセジュ.
- Bailey, David C. (1974) *¡Viva Cristo Rey!: The Cristero Rebellion and the Church-State Conflict in Mexico*. Austin: University of Texas Press.

Ibsen, Kristine. (2010) *Maximilian, Mexico, and the Invention of Empire*. Nashville: Vanderbilt University Press.

Meyer, Jean A. (1976) *The Cristero Rebellion: The Mexican People between Church and State 1926-1929* (Cambridge Latin American Studies 24). Cambridge: Cambridge University Press.

Quezada, Ruben et al. (2012) *For Greater Glory: The True Story of Cristiada, the Cristero War and Mexico's Struggle for Religious Struggle*. West Covina, California: Ignatius Press.